吉田寮の補修

文責:補修特別委員会

吉田寮には、歴史的な建造物の多い京都市内でも有数の築 110 年の現棟がある。この建築的な魅力に惹かれて入寮した学生も少なくない。現棟には京都の気候条件に合わせた工夫(通気性、耐震性、防湿性等)が取り入れられており、環境に調和しながら長期間利用することができる一方、そのためには持続的な補修が必要である。本稿では、本年度寮を守るために実施された補修の一部と、その手順について取り上げる。

1.土壁補修(粗塗り)

粗塗り前

粗塗り後

土壁は日本建築で広く用いられていて、調湿作用・保温性・耐震性・吸音性などに優れている。一方、湿気や乾燥、時間経過の影響を受けてひび割れたり崩れたりするため、定期的な補修が必要である。この補修は比較的容易であるため、寮生もよく実施している。土壁塗りは一般には粗塗り、中塗り、漆喰塗りの 3 つの工程に分かれている。それぞれ、土壁の基礎の層の形成、表面の調整・保護、美観の調整・防火・調湿という役割がありどれも重要である。ここでは、最初のステップ:粗塗りの手順について説明していく。

1. まずは実際に補修する箇所を確認して、触って簡単に土壁が剥がれる箇所や、押すとへこむような箇所を外す（上載の粗塗り前の写真は外した後の様子)。

2. 土を塗るエリアの大きさに合わせて竹を格子状に組み込んでいく。また、竹が補修個所の周辺から浮いてしまわないように、麻縄なども使いつつ、周囲と固定する。麻縄の代用としてビス等を用いることも可能。

必要な竹の長さを測る

大きさに合わせて竹を切る

完成イメージ

3. 次に土壁の材料を作る。土・砂・わらすさを、体積比で、土：砂：わらすさ＝１：１：１となるように配合する。また、崩しておいた土壁の破片も入れる（漆喰は入れないように）。そして、水を材料の３割程入れ、くわで混ぜる。水を入れすぎないよう注意する。もったりとするくらいの水加減（泥団子作るよりも少し柔らかいくらい）。

土、砂、わらすき、土壁破片

水を入れて混ぜる

竹小舞の上から粗塗りをする。粗塗りをする際は、滑らかに整える必要はなく、むしろある程度凸凹した方が中塗りの食いつきが良い。本来は表、裏両側から塗るのだが、それが出来ない場合は頑張って土を押し込もう。

これで、粗塗り完了！

2.下見板補修

下見板は、日本建築の外壁に用いられている。外壁に取り付けられることで、外壁を雨水や湿気から守り、外壁の劣化や腐食を防ぐことができる。特に、吉田寮の外壁は土壁であるため、外壁の耐久性向上のために重要である。また、装飾としても非常に重要であり、実際に吉田寮新棟でも同様の工法が用いられている。もちろん時間経過するごとに木材に腐食や割れ、剥がれなどが生じるため、定期的な補修が必要である。以下にその手順の手法を示す。

吉田寮新棟・現棟の下見板構造

1. まずは、実際に張り替える下見板に防腐剤を塗布する。高い防腐・防虫・防カビの効果があり、塗布の有無で板材の持ちが 3 年ほど伸びるという。また、補修個所の大きさに合わせて板の長さを調整することも事前にやっておく。
2. 次に、古い板材を取り外す。吉田寮の板材はビスで固定されていたため、バールでこれを取り外した。高所での作業時には安全帯、安全靴、ヘルメット、足場等を利用する。
3. 最後に、1 で用意した木材をビスで取り付ける。

防腐剤の塗布の様子

古い板を取り外す様子

新しい木材をビス留めする様子

3.枝切り

吉田寮の中庭にはたくさんの樹木が生育しており、中には背丈が 30m を超えるようなものもある。しかしそうした樹木の枝が現棟の建物にかかると、枝からの落ち葉などが雨樋に溜まり、雨水等がうまく排水されず、雨漏りの原因や建物が朽ちてしまうことの原因となってしまう。また、高くなりすぎた木が、台風などを機に倒れてしまうことも考えられる。そうしたことを防ぐため、補修特別委員会は定期的に建物に枝が掛かってしまっている樹木の枝や樹木そのものを伐採するなどしている。

樹木から剪定した枝を更に細かく切る様子